

2-0-8

ネパール カスキ郡デタール村におけるプライマリヘルスケアに基づいた住民参加型の生活改善活動 ～安全な水の供給推進を中心に2年間の活動報告～

上野 理恵
柳田 潤一郎、野村 秀明、畑 吉節未、鎌田 美智子

2012年より国際協力機構 草の根技術協力事業として、3ヵ年計画でネパールにおいて安全な水の供給推進を中心に、プライマリヘルスケアに基づく住民参加型の生活改善活動を実施している。

1年次は、介入前の健康診査と共に、水と衛生環境、健康に関する意識調査を行い、住民の健康実態を把握すると同時に、モデル地区の砂ろ過装置設置を順次すすめた。調査結果から、当該住民は水、衛生管理の知識が低く効果的な対策が講じられておらず、汚染された生活水による慢性的な下痢症・低栄養状態を認めた。2年次は、1.水汚染と下痢症について理解を深める、2.飲料水確保手段（砂ろ過装置作製と維持管理・煮沸/太陽光消毒法）の理解、習得を促す、3.手洗いの励行を促すことを目的に、非識字率64%の現状をふまえた健康教育テキスト、ポスターを作成し、モデル地区へ配布、健康教育を実施した。この流れから、安全な水の管理を組織的に行っていく水ろ過統合調整委員会（仮称）が設立された。この運営にあたって村の各委員から代表者を選出、来日し、本学を拠点に安全な水管理や保健医療活動、学校保健、環境衛生などの生活改善に関する研修を受け、組織運営に活かされるよう支援した。3年次前半は、前年の健康教育テキストを発展させ、低識字に対応した実践マニュアルを作成・配布した。後半は介入後の健康診査・意識調査を行い、介入前の同データと比較し健康状態の変化から本活動の成果を検証する。

2-0-9

医療人の一般教養（常識）：「血液型と性格の関連」教育の結果

高岡 裕
菅野 亜紀、大田 美香、熊岡 穰、関口 紗代

血液型による性格分類とは別名で血液性格診断といい、我が国のアカデミアでは昭和初期に提唱された。しかし血液型と性格の関連性は、太平洋戦争前に学会で否定されている。ナチスドイツでは、アーリア人至上主義を説明する理論としても使われたことで知られる。第二次大戦後、放送作家の能美が70年代から自身の研究成果から血液型と性格の関連を提唱し、今では我が国の誰もが知っている常識となってしまった。もちろん、能美は科学的方法論のトレーニングを受けたことはなく統計解析の体をなしておらず、これは擬似科学に過ぎないし、信じられているのは日本のみである。

最近では入社の採用基準や社内人事に血液型を使う例もあり、もはや笑い話では済まない。我々は医療人の卵（神戸常盤大学：臨床検査、森ノ宮医療大学：看護、理学療法、鍼灸、熊本大学：医学科）への情報教育を担当していることから、医療人は客観的事実（数値化）を基盤として医療記録を残すことも教育している。EBMやEBNが医療の基本にもかかわらず、多くの学生達は血液型と性格の関連があると信じて入学してくるのが現状である。情報科学の授業で「統計学の初歩」や「医療と情報」等の回に、客観的に見て血液型と性格の関連はない旨を教育してきたので、それらの内容と定期テストの結果を紹介する。